

大都市部における格差拡大の進行過程とその社会的帰結に関する研究

(4) 首都圏アンダークラスのメンタルヘルス

—「非正規雇用者の基幹労働化」の帰結—

東北学院大学 片瀬一男

1 目的・背景

バブル崩壊から 20 数年たち、ロストジェネレーションでも初期の者は、40 歳代を迎えようとしている。非正規雇用で就労した場合、そこからの脱出困難性ゆえに、近年は中高年の非正規労働者の増加が著しい。こうした中高年非正規労働者は、労働者階級の最下層にあるというより、伝統的な「労働者階級」以下の存在—「アンダークラス」という性格を帯びる（橋本 2013）。さらに、近年の企業の人事管理方針の転換により、非正規雇用者の「基幹労働化」が進んだ。非正規雇用者の「基幹労働化」は量的なもの（長時間労働）と質的なものに分けられるが、質的基幹労働化はさらに、多様な単純労働を割り当てられる「多能的基幹化」と、レベルの高い職務を長時間続ける「高度基幹化」に分けられる。そして、前者がパート主婦に割り当てられるのに対して、後者は 35 歳以上の中高年非正規雇用者に割り振られるという（津崎 2009）。こうして基幹化した非正規労働者は、意思決定の余地（コントロール）を欠いたまま、要求度が高い基幹労働を担うという点で、仕事の「要求度-コントロール」モデル（Karasek and Theorell, 1990）でいうストレインの高い状態にある。本報告の目的は、このモデルを用いて、非正規雇用の基幹化がメンタルヘルスを悪化させるメカニズムを探ることである。

2 データと方法

分析には 2016 年に行われた「首都圏住民の仕事・生活と地域社会に関する調査」データを用いる。メンタルヘルスに関しては、抑うつ傾向(ディストレス)を測定する K6（Furukawa et al, 2008）を用い、仕事の条件としては「要求度-コントロール」モデルからストレインを計算した。

3 結果

35～59 歳の男性非正規雇用者で、法定労働時間の週 40 時間を超えて働く者は 68%にのぼり、量的基幹化が著しい。他方、K6 で測定した抑うつ傾向について、階級別にみたところアンダークラスで有意にディストレスが高かった。そこで、抑うつ傾向を従属変数とし、年齢・性別・階級ダミーを独立変数とした重回帰分析を行うと、年齢や性別をコントロールしても、アンダークラスに属することは抑うつ傾向を有意に高めていた。さらに、仕事の「要求度-コントロール比」を追加すると、アンダークラスの効果は有意ではあるものの、それ以上に「要求度-コントロール比」がディストレスを高めていた。そこで、要求度とコントロールを別個に入れると、いずれの効果も有意となったが、アンダークラスの効果が有意でなくなるのはコントロールを投入した場合のみであった。このことから、アンダークラスであることがメンタルヘルスの悪化に及ぼす効果は主として仕事のコントロールの低さに媒介されるものであることが示唆された。また要求度を階級別に比べると、アンダークラスで最も低く、非正規の質的基幹化でも、高度基幹化はまだ部分的にしか進行しているにすぎない。その結果、コントロールも低くなっているとも考えられる。

4 結論と課題

本研究では、仕事のコントロールの低さがアンダークラスであることと抑うつを媒介していることが示されたが、「高度基幹化」した仕事を割り当てられる中高年の非正規雇用者には、とりわけ正規雇用者との格差に不公平感を抱く者が多いとされる（津崎 2009）。こうした組織の不公平性はまた、ディストレスをさらに昂進する要因となることは、これまでも指摘されてきた（Inoue et al. 2008）。今後は個人レベルでの仕事の条件に加えて、組織の公平性というメゾレベルの要因も考慮して、基幹労働化したアンダークラスのメンタルヘルスを悪化させる要因連関を究明していくことが課題となる。

【付記】 図表・文献は当日、配布する。本研究は平成 27～30 年度基盤研究（A）「大都市部における格差拡大の進行過程とその社会的帰結に関する計量的研究」（課題番号 15H01970 研究代表者：橋本健二）による成果の一部である。